新設備導入で事業拡大へ

さがみ工業団地探訪

金属機械工業団地②

金属機械工業団地に本社工場を置く第五電子工業（相模原市緑区橋本台）は、1973年に清新から移転した企業。ステンレスを中心に、金属加工を得意としている。

特に半導体製造装置のほか、電子機器筐体、真空配管、水冷配管などを製造。近年のスマートホンやタブレット型パソコンの普及を受けて好調だが、山谷が激しい分野でもある。

強みは、板金から機械加工、組み立てまで、ワンストップで自社対応できること。社内にクリーンルームを有し、半導体分野に似た医療・食品・化学分野への進出も視野に入れている。

同社では、新しい設備の導入を積極的に進めているという。14年末にもファイバーレーザー溶接機を1台導入し、事業領域の幅を拡大する狙い。

同機は加工時の"ひずみ"が少なく、厚さ1ミリメートル以下の薄い物の溶接が容易。また、溶接痕が微細となるため、美観を要するアルミ製の外装材などの加工にも適応できるという。

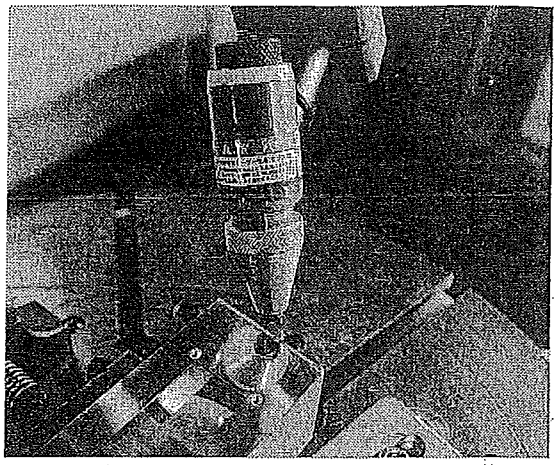
マシニングセンター（4月）とNC旋盤（夏期）を導入する予定。設備投資は「ものづくり補助金」を充てる方針。同社は、3度目の採択を目指し、経営方針を検討している。

従業員数は2月末現在約40人で、4月に4人が入社する予定。5年前から大学や高校などの新卒者採用を行っている。

一方、60代以上の従業員で退職を控えた者も数人いる。技術の継承が課題となるが、ファイバーレーザーなど新技術を導入することで、若手技術者に新分野開拓を託している。

水田光臣社長は「新卒者を一から育てた方が、第五電子工業の企業文化に馴染みやすい。手に職を付けたいという学生も多く、成長を見守る楽しみもある」と、確かな手応えを感じているようだ。

今後の展望については、「この2年間が改革期だ。より顧客のニーズに応えられるよう最新の設備を導入し、他社との差別化を図っている」と話していた。



昨年末に導入したレーザー溶接機

事業改革を行う本社工場

2015.3.10 相模経済新聞 掲載